

みなさんは、洗礼を受けてクリスチャンになったわけですが、クリスチャンになる、とはどういうことだと、みなさんだったら説明されますか？ 今日は最初から具体的な話をします。

祈祷書の274ページに、洗礼の時の「勧め」として次のような言葉が出てきます。

「愛する兄弟よ、主イエス・キリストは、だれでも水と霊によって新しく生まれなければ、神の国に入ることができない、と教えられました。」

新しく生まれること。新しい人間になるので、新しい名前を付けるということです。今までの、小林史明が、フランシス小林史明にかわるのです。それで洗礼名を付けるのですが、それでは、どのような生き方から、どのような生き方にかわることを言うのでしょうか？

私は、クリスチャンになる、というのは、簡単に言うと、死海のような生き方から、ガリラヤ湖のような生き方に変わることだ、と思っています。

皆さん、イスラエルの地図が頭に浮かびますか？イスラエルには、二つの大きな湖があります。一つはガリラヤ湖。もう一つは死海です。どちらも海面下200メートルとか400メートル。海の高さよりかなり低いところなんです、景色はまるで違います。

死海というのは、地上で一番低いところにある湖です。ここには、特にガリラヤ湖から流れてくるヨルダン川とか、そのほかの川からも水が入るばかりです。ところが暑いので水は蒸発します。でも、周りには岩塩などがたくさんあって、それが雨水などに溶けて流れてくるので、とても塩分の多く含まれた湖です。ここでは、どんな人もこの中に入ると浮いてしまうんですね。しかし、長い間入っていると、体の中の塩分濃度との違いで、体から水が出てしまうので、早めに湖からあがらなければなりません。

ところで、この死海周辺を眺めてみると、ほとんど植物が生えていません。死海は水を取り込むだけで、ほかにその水を与えないので、植物が育たないし、湖にも魚はほとんどいません。それで、死海と言うのでしょうか。でもヨルダン川が流れてくるあたりにだけ、少し魚がいるようです。

一方、ガリラヤ湖に行ってみると、同じように海面より低いところなのに、緑豊かな土地です。たくさんの植物が生えていて、湖にも多くの魚が住んでいます。ペトロたちもここで魚を獲っていました。このガリラヤ湖も低い土地なので、ヘルモン山などの雪をいただく山から雪解け水が流れ込んできます。その川もヨルダン川と呼ばれています。しかし、この湖は塩分がない淡水なので、この水を引いて、この周辺は農業が盛んなのです。そして、たくさんの水がヨルダン川などを通して提供されているから、とても緑豊かな世界ができあがって行くのです。16年前、エジプトからシナイ半島を通過して、砂漠の長い道のりを旅して、死海を通過しながら、ヨルダン川沿いを北にゆくと、だんだん緑が増えてきて、ガリラヤ湖のあたりは、本当に夢のように緑の深まっている、緑の植物に覆われた世界でした。

これは、何も、ガリラヤ湖が立派で、死海がだめだ、というわけではありません。しかし、これらの湖が人間であり、流れる水がお金とか、富とかいうものだったらどうでしょう。

たくさんの水を取り込んでばかりの死海と、たくさんの水を周りに与えているガリラヤ湖と、どちらが豊かか、ということになると、何となく、ガリラヤ湖の周辺に住みたいなあ、という気持ちになりますし、そんなみんなに命の水を与えるような人がいたら、近くに居たいなあ、と思うでしょう。

私たちが目指す生き方、というのは、お手本は、もちろんイエス様であって、だから私たちはキリストに属する者、クリスチャンと言われるわけです。それは、具体的に、自分の持ち物に執着して、自己中心の生き方をすることから、周りの人のために働く者に変えられて行くことだろうと思います。

ユダヤ人哲学者のエーリッヒ・フロムという人は、「愛するということ」という本の中で、こんなことを言っています。

『物質の世界では、与えるということはその人が裕福だということである。たくさん持っている人が豊かなのではなく、たくさん与える人が豊かなのだ。ひたすら貯めこみ、何か一つでも失うことを恐れている人は、どんなにたくさんの物を所有しようとして、心理学的に言えば、貧しい人である。気前よく与えることのできる人が、豊かな人なのだ。 (中略) 誰でも知っているように、貧しい人のほうが豊かな人よりも気前よく与える。』

3週間前ですが、礼拝の福音書に、善いサマリヤ人の話が登場しました。社会的な身分の高い、祭司やレビ人は傷ついた人の隣人になれなかったけど、日頃痛みを覚えて、貧しい生活をしているサマリヤ人こそが、人を助けることができた、という話と相通じるところがあるように思います。あのサマリヤ人の方が、実は人間として豊かなんだ、ということをこの学者も言っているように思えました。

さて、今日の福音書は、「遺産を自分にも分けてくれるように自分の兄弟に話してください」、とイエス様に訴えている人の話から始まります。イエス様は、人間の中にある食欲に気をつけるように注意されます。

いくら財産があっても、命がなくなったら、財産は意味がない、ということで、愚かな金持ちのことをたとえに出されました。将来の安定した生活のために、自分の財産をしまいこむ生き方を、愚かな者、と言われていました。そして、最後に「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」と言われました。

自分のためにいくら財産を増やしても、それだけでは空しい生活。そして、何も持たないでこの世を去らなければならない、と語っているのです。

それじゃ、神の前に豊かになる、とはどんな生活なのでしょう？

その結論は、今日の福音書の少し後、12章32節～34節にあるように思えます。

『32:小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。33:自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。34:あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。』

お金は貯めるものではなく、人々のために使うものだ、ということでしょう。

私は11年ほど前に教区報のコラムに「バベットの晩餐会」という映画の中で、亡くなった牧師さんをみんなが思い出す場面を紹介しましたが、みんなに慕われていた牧師さんが語っていた言葉が登場します。「私たちが、天国に持ってゆけるのは、他の人に与えたものだけだ。」という言葉でした。

自分の財産をため込んでも、それをあの世には持ってゆけない。それより、他の人に何かを与えたら、それは天に宝を積むことになるから、持って行ける、ということを牧師さんなりの言い方で説教したんでしょう。

死海が、自分の中に水をためこむだけで、周りに何も与えないのと反対に、ガリラヤ湖は、もらった水をほかに与えているので、緑が豊かになり、人々も住みたくなるのです。このような世界をイエス様は望んでおられるのではないのでしょうか。

ただし、イエス様も、単なる財産のことを言っておられるのではなく、もっと広い意味での与えることの重要性を語っておられるように思います。

先ほどのユダヤ人哲学者は、物質の世界ではなく、自分の心の世界、自分の生活の中で息づいている喜びとか、自分の関心を持っている興味あること、学んだ知恵や知識、ユーモア、そして体験した悲しみなども、これらは与えることのできるものだ、と言うのです。

どうでしょうか。私たちは財産とかお金とかは、与えたらなくなってしまう、と考えますが、自分が味わった喜び、感動などは、ほかの人に伝えたら、ますます豊かになり、それはほかの人の似たような体験まで聞くことになって、何倍にも増えてゆく、ということはないのでしょうか。

自分が以前に感動した映画を、教会でみんなと観られるように、セットして、実際特定の時間を、一緒に映画を観ることで、ともに体験すると、豊かな感動が伝わってゆくと、みんなで笑ったり、泣いたりできる、素晴らしいことです。

だから、与えるということによって、自分が損をしたり、耐えて苦しむことになる、と考えるのではなく、与えることは喜びであり、それを受け取った者も、また与える者に変えられてゆく。そんな恵み、力を私たちは与えられているのではないのでしょうか。

私たちが日頃、生活の中で得た喜びを、みんなで分かち合えるようになる時、わたしたちは、お互いの交わりを本当に意義のあることと感じて、それを続けられるのです。

聖公会は、アングリカン・コミュニオンと言って、交わりを大切にする教会です。与えることによって、自分の中に喜びがあふれ、相手も与える者に変えてゆく。楽しい交わりの教会を目指したい。私たちが社会の人たちに与えることの素晴らしさを伝えて行ける教会になりたいものです。

